

NHK特集「日本の条件」のめざすもの

岩下 恒夫

評論家の鈴木均氏は、昨年6月の放送批評に、NHK特集「日本の条件 マネー・お金が地球を駆けめぐる」について次のように書いている。

『経済学を学んだ私が、テレビ批評を始めた今から17年ほど前には、経済の動きを「ドキュメンタリー」で表現できるなどとは露ほども思っていなかった。「経済がわからなければ、世の中がわからない」と思い知っていたはずなのに、そういうゾルレン的思考はテレビの前では少しもおこってこなかった。そのころ、私の仲間が「経済番組」はもっと面白く作れるはずだと始終言っていたのを思い出す。そのころの経済番組は、1人の専門家による解説だけであった。その後NHKに「1億人の経済」が生まれたが、これも座談会にグラフのついたようなもので、伊東光晴や、松岡碩夫のような優れたエコノミストの話の面白さで番組をもたせていたのである。――

いわゆるニュー・ジャーナリズムが、活字世界で人気を得だしたころから、安宅産業の没落を追ったドキュメンタリーや、ドラマが作られたりしたが最近のNHKの「日本の条件・マネー・お金が地球を駆けめぐる」は、今までの番組とは異なって資本主義社会の真髄たる「金融資本」をまともにドキュメンタリーで画こうと試みた不敵な冒険とでもいうべきものであった。

私はその第2、第3篇である「通貨戦争」と「オイルマネー」の2本を見たのだが、国際資本主義の動く姿を、こんなにわかりやすく手に入れられるとは思ってもみなかった。

日本のテレビマンは、文明論を“トーク”でなく見せられることに自信をもち始めたのだ。これは今までのドキュメンタリーではない、まったく新しい工夫によって現代の「資本論」を映像で画いて見ることに成功した。しかも、ブレトンウッズ体制から石油大国にいたる戦後経済史のラフスケッチをこのNHK特集はみごとに引き出してくれた』

日本の条件の第1シリーズ「マネー」は、今までになかった新しいタイプの番組として内外の高い評価を得た。それは、国際経済をお金の流れでできるというきり口の新鮮さと、プレゼンテーションの新しさにあった。

私たちは円安とか円高とかいう言葉は知っている。また、ドルと円を交換する、もしくは円でドルを買うということは知っている。しかしそれが具体的にどういうところで誰が行ない、その結果がどうなるのかについてはあまりにも知らない。しかもこのお金の流れは私たちの生活に直接響いてくる。私たちは、お金でお金を買うという世界的な仕組みを、できるだけ具体的に提示しようと試みた。銀行のディーリングルームをスタジオに再現し、その機能を説明する。一方で、世界中の

いわした つねお NHK スペシャル番組部

銀行の名ディーラーの生活と意見を密着取材し、固苦しい金融の話を人間の動きとして表現した。しかもそれは、国と国との威信をかけた虚々実々の戦いであると同時に最も秘密の世界でもあった。銀行のディーリングルーム、それは、今だかつて取材を許すことのなかったタブーの世界でもあった。ここに日本の条件「マネー」のもう1つの特徴がある。タブーへの挑戦である。

私たちはこの番組を企画するに当り、できるかぎりの資料を集め、さまざまな調査を行ない、各分野の人々に会い、教えをこらう。その中で銀行や大蔵省、そして経済ジャーナリストからさえも素人が国際金融問題に手を出すとはとんでもないことだ、また国益にも反するし、とにかくやめたほうが身のためですよと何回も言われた。私たちはこの言葉の裏にあるものを探り出したいと思った。タブーの裏には、知られざる情報が豊かに存在しているに違いないと確信した。戦後の日米交渉史、現代を支配するオイルマネー、銀行のディーリングルーム、私たちは、タブーへの挑戦が視聴者に最もアピールするプレゼンテーションにもつながるものと確信した。

戦後の日米交渉裏面史を語る人は多い。しかし円の変動相場制へ移行する激動の瞬間を語る人は少ない。アメリカのコナリー元財務長官はその数少ない人間の1人であった。レーガン選挙の中心人物であったコナリー氏は取材班のインタビューの申し入れにどうしても応じてくれなかった。そればかりかその居所さえ明らかにしてくれなかった。取材班はアメリカ中を探し歩き、辛くもインタビューに成功したのは取材スケジュールの最終段階であった。取材班の会ったコナリー氏は、まるで腰に二丁拳銃をぶちこんだような西部のダテ男であった。彼の語る戦後の通貨戦争の面白さは、コナリー氏によってのみ表現できるものであった。私たちは、映像の組み立てをコナリー氏の顔の表情をいかに生かすの一点に集中した。

鈴木均氏は、先の評論の中で次のように書いて

いる。

『ここでコナリーを議長とする各国代表による世界金融会議が開かれて、虚々実々の論議の結果、一挙にコナリーは、ドルの10%切り下げ案を提出する。スミソニアン会議である。カメラは、各国代表が色蒼ざめて40分間も会場は静まりかえったと語る、コナリーの得意満面の顔を映し出す。知的勝負に勝った。その一瞬を語って見せるこの映像は忘れがたい。われわれの見えないところで行なわれてきた「通貨戦争」の実態を当時者の口を通して語らせ映像化させると、非人格的な「マネーの動き」がいかにして世界の大勢を決めてきたかが、ひどく人間臭く伝わってくる』

国際金融界はパーティーの世界である。パーティーでそれとなくかわされる握手が重要な意味をもつ。世界の金融界に君臨する、かのロックフェラーが1年に出席するパーティーは数知れない。握手する相手の数は1日で500人を越えるときもあるという。彼の最大の武器はそのぼう大な人脈である。私たちは、現代の怪物、オイルマネーの動きを中東の砂漠にくり上げられる連日連夜のパーティーで描こうと考えた。調べ始めたスタッフはそのスケジュールの過密さに改めて驚かされた。日本の銀行が1年間に13回のパーティーを開き、多勢の政財界の有力者を招待していた。1980年2月8日バーレンの一流ホテルでロックフェラー主催のパーティーが開かれた。彼は中東7カ国を訪問し、連日パーティーを催し、国王や財界の大物と握手を交してきた。

鈴木均氏は書いている。

『オイルマネーにしてもそうである。「国際経済論」とか「国際金融論」とか頭の痛くなる問題が、第二次大戦後のにわか成金アメリカから、非文明の小国サウジアラビアにいかなる形で移動したか、砂漠の国と思われた中近東諸国が途端に金持

ちになって、その金をいかにまわして、より豊かになるか苦慮している産油国の王侯たち、そこへ金バエのようにたかってくる先進国の使者たちのパーティーにつぐパーティー戦術は、なんともおかしい。1つの喜劇でさえある。私は、これはどうやら某国の映画、駅前シリーズでも見ているように思えてきた。マネーの使い方がわからないのだから、敵だとか味方だとかいってはいられない。アメリカの一コンサルタントにでもすがりつきたい。そういう人の渦が右往左往している。何も小むずかしい活字を追うことはない。ひと目でわかる。持ちつけない金を持った産油王をめぐる『狐と狸のばかし合いである』。

NHK特集「日本の条件」を制作するに当って私たちは、つねに3つの条件を満足させることをめざしている。

- (1) 日本で初めてという材料：情報であること、特ダネ性
 - (2) 放送のタイミングのよいこと、ニュース性
 - (3) ユニークで新鮮な切り口で料理する。構成の面白さをつねに考える
- これを「日本の条件」の条件として、今までは
マネー・お金が地球を駆けめぐる
外交・何が世界を動かすか
食糧・地球は警告する
貿易・なにが日本を孤立させるか
医療・あなたのあすを誰が看る

の5シリーズを制作した。

さて私たち日本の条件プロジェクトが「日本の条件」にとりくむ1年前にその原形ともいべき番組を制作している。NHK特集「石油・知られざる技術帝国」シリーズである。

この番組は放送と同時に一般の視聴者、石油業界、通産省などの役所まで大きな話題を呼んだ。

(石油文化賞、科学番組優秀賞、放送文化基金大賞など受賞) この評価は石油を政治や経済でなく、技術というまったく別の角度からとらえたこ

と、同時に今までにない「プレゼンテーション」の新鮮さが大きな魅力となったものと考えられた。「日本の条件」について語るにはこの番組について考えることが一番わかりやすい。

「日本の条件」プロジェクトが石油番組の企画にとりくんだのは、3年前第2次石油危機の直前で、ちょうど今と同じように石油需給のゆるんだ時期であった。私たちは、大型の調査報道番組を模索する中で80年代の日本の死命を制するのは依然として石油を中心とするエネルギー問題であると結論に達した。6人のディレクターは番組化のための取材を開始した。

一般的には石油危機の記憶はうすれ、原油価格も安定していたため、私たちの周囲では、「今さら何で石油をやるの」とか「何か新しい情報はあるの」とか冷笑される雰囲気であった。

OPECの石油戦略の研究、石油メジャーの力の背景、ソビエトの石油事情、日米石油関係史、オイルショックにみる日本の石油行政の研究などテーマを選び取材の柱を立てていった。われわれテレビディレクターは、とりあげる対象にはほとんどの場合素人であるが、それを番組化することではプロでありたいと願っている職人集団である。ディレクターたちは、通常の番組作りの手順どおり手分けして資料を集め、本を読み、人の話を聞き、議論しながら番組のねらいをしぼり構成を固めていった。

企画の仕上げの段階でスタッフは、NHKの石油問題の専門家である解説委員の大内幸夫氏に意見を求めた。スタッフ一同、これまでに仕入れた知識を目いっぱい使って、石油価格の将来は、ソビエトの石油需給の限界は、メジャーズの市場支配力はどうかとさまざまの質問をあびせかけた。自分たちの調査の正統性と確かさを確認する意味もあった。われわれの話に耳を傾けていた大内氏は、スタッフの話をも突然さげぎって、こう切り出した。

「ところで君たち、石油が地下でどんな状態で

たまっているか知っているかい」

あまりにも初歩的な、しかも出しぬけの質問に一同虚をつかれて沈黙した。そんな当り前のことをと一瞬ムツとしたものの、考えてみれば正確な知識をもっているわけでない。1人がおそるおそる答えた。

「中学生のころ、教科書の絵にありましたが、こう縞模様の地層があってその下に黒いものがたっぷりと溜っているのでは——」

「だから君たちは駄目なんだ。そういう基礎的なことを知らないのでは、石油問題を見まちがえますよ」

大上段にふりかぶり、ちょっとした石油評論家気どりだったスタッフはただ呆然とするばかり。

「地下の石油は液体でプールのように貯蔵されており、その場所を掘り当てパイプをさしこみさえすれば、注射器で吸い上げるように一滴も残さず楽々と地上に取り出せるものと多くの日本人は信じているが、それは大きなまちがいです。地下の石油は液体ではなく“石油を含む岩石”であることがとても重要なことです」

さらに大内氏は、いま5000mもの地底にある油層を探し出し、掘り進み、取り出す技術は宇宙工学にも劣らず、いかに複雑で高度な段階にきているか、しかもそれまででも取り出せる石油は、油層にひそむ原油全量のわずかな割合にすぎないこと、いま、残された地球の石油をめぐって、世界の石油技術陣が国家の生存をかけた闘いに入っていることなど、石油技術の基礎知識をかんてふくめるように話してくれた。

「こういうものを見たことがありますか、このビットですが——」

と自分で買い求めた直径20cmほどのズッシリしたビットの実物を取り出した。一見粗い鋳物にしか見えないが、内部は精密に工作されており、固い岩盤を削り地下数千mを掘り進む重要な刃先で、石油開発の成否はこのビットの性能に左右されるほどだという。それ故にその独占技術を

有するアメリカは、対ソ交渉の駆けひきの道具としてこのビットを利用しているなどと、話は石油技術の戦略性にまでおよび、スタッフは目からうろこの落ちる思いで聞き入った。

私たちは、これまでの企画案全部を書き変えることにした。石油問題を需給、政治経済の関係だけで見ているものを技術という座標軸で見直すことにした。スタッフは石油技術にしばって専門家の話を聞き、資料、映像素材を集めていった。

この段階で私たちは1つの発見をした。NHKの石油関係の海外取材番組や、内外の石油会社から借用したPR映画を見ていて気がついたのだが、どのフィルムも技術的な部分の説明を過不足なくしているのである。大内解説委員の話で驚いたビットについても、掘削技術についても、油田の地下構造についても、実際の現場の映像やアニメーションでたくみに解説されているのである。しかしなぜか、われわれの印象に残らないのである。見方によっては実に手際よく処理されており、流れるようなアナウンスコメントと、快調なテンポの映像処理が、かえって印象をうすくしているのではないだろうか。このことが私たちに1つの暗示を与えてくれた。

視聴者に、われわれの情報を理解してもらわなければ、どんなにカッコいい番組を作っても意味がない。われわれは、どんなに泥くさいやり方でも気にしないことにした。とにかくみている人にわかってもらいたい。

視聴者に実物はこれなのだと手にとってみせる。私たちの伝えたい見せたい現場はこうなっているのだとプレゼンターに代理体験をさせる、世界中の石油現場であらゆる資料を集める、パンフレットからマッド、コア、検層ログ、そこで生産される原油、そして映像資料まで可能なかぎり集め日本に持ち帰り、プレゼンターがこれをスタジオで提示する。私たちは、これまでの単なるフィルムドキュメンタリーでないやり方で番組を構成することにした。

スタートから6カ月後、北海、北極海、中近東、アメリカと取材班はとび、番組（石油・知られざる技術帝国 第1部 地底の戦い）は、石油は石であることを証明する勝部キャスターのコア見本

の説明から始まった。

集めた材料をどういうふうに料理して視聴者にアピールするか、担当ディレクターの考えた構成は次のようであった。

NHK特集 石油・知られざる技術帝国

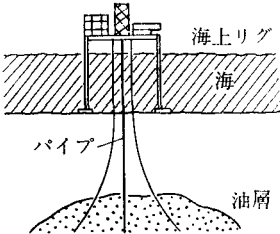
第1部 地底の戦い 構成表

項目	映像	音声	コメント	⑩はフィルム ⑨はスタジオ SE 効果音 M 音楽
①	オープニング	SE	激しい暴噴	
⑩	北海に吹き出す海底油田の石油 火災防止に必死のヘルファイター (トップタイトル)		北海最大のエコフィスコ油田で掘削作業中突然、ガスと油が吹き出した。 暴噴の恐ろしさと、9日間にわたる地底との戦い。	
②	世界の石油現場をめぐる	M	アラスカ魂	
⑩	勝部キャスター ・サウジアラビアの砂漠と油田 ・北極の掘削船 ・北海海上リグ、勝部キャスターカナダ ・北極圏、永原キャスター ・テキサス大学 石油工学部 教室のキャスター ・成田空港 日航機着陸		アラスカ魂のメロディにのせて勝部キャスター世界を1周する。映像と音楽のみでつなぐ。勝部キャスターが世界の石油現場をめぐり、ホットな情報をもち帰ったことを印象づける。 (2分間の短い時間にキャスターが石油に関しては世界の一流の情報をもっておりプレゼンターとして信頼できることを印象づける)	
③	石油は石だ		キャスター	
⑨	キャスター大きなトランクをもって ・スタジオに登場 ・トランクの中は石油の資料でいっぱい ・石をとり出し木づちでたたく ・石の臭いをかぐ ・日本の石油関係の出版物をすべて集めた本棚(技術関係の本ほとんどなし)		・まずこれをご覧ください。この石ころ、コアと言うが皆さんは一体何だとお考えでしょうか。 実はこれが石油なのだ!! 北海油田のひとつエコフィスコのものです。 ・私たちは今回 石油に政治経済の面だけでなく技術という新しい角度からとりこんでみたい。 日本人は世界の生産量の1/10という大量の石油を使っているが石油とは何か、どうしてとるかまったく知らない。石油技術は今や、米ソの重要な政治戦略に組みこまれている。	
④	石油掘削の歴史	M	映画ジャイアンツ主題歌	
⑩	1) 石油技術のメッカ ヒューストン 名画、ジャイアンツの主人公ジェット・リンクのモデル グレンマッカシー氏インタビュー		吹きかえ タモリ、九州弁で南部なまりを表現 ・グレンマッカシーの語る1930年代の西部の石油開発、8才の時から石油現場で働く。	
⑩	2) 映画 ドレーク物語		映画解説 弁土、タモリ ・近代的な掘削技術の第1歩 ・キャスター	
⑨	3) 石油油層模型による説明		石油とは、なぜ噴き出すか	

<p>⑤ 石油探査技術</p> <p>⑩ 各国資料映像</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルプアルハリ砂漠の探査 (サウジ) ・北極圏の石油探査 (カナダ) ・サモトロールの石油 (ソ連) ・大慶油田の記録 (中国) ・石油資源を拓く (日米) 	<p>各国の映画を使って探査の実際、むづかしさ、重要性をわかりやすく説明する。ソロバンを利用して計算する中国の技術からコンピュータを存分に利用するアメリカの最先端の技術まで。</p>
<p>⑥ 石油掘削技術</p> <p>③ 1) 掘削装置 (リグ) 模型 (帝石, 天覧精密, 電動模型)</p> <p>③ 2) ビットの回転テスト</p> <p>③ ビットの構造と種類</p> <p>③ 3) マッドの技術 アニメーション 中国の人海戦術</p> <p>③ 4) 暴噴 テキサス大学石油工学部のテキスト用フィルム を使用して暴噴のすべて</p> <p>③ 5) 日本人の体験した暴噴の瞬間 I氏所蔵の8ミリフィルム。</p> <p>③ 6) 中国の暴噴 大慶油田の記録, 人海戦術</p>	<p>キャスター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最新の技術を駆使した地下探査でも、実際に石油が出るかどうか、試し掘りしてから生産まで5年から7年の時間がかかり、しかも莫大な資金が必要である。しかも試し掘りしてもすべて石油が出るとはかぎらない。リスクは大きい。 掘削技術を左右するのはビットとマッドの技術である。 ・マッドの原理 なぜ地下数kmの掘りくずを地上に出すか、地下の圧力になぜ耐えるか。 ・地下の圧力のすごさ、マッドが教える地下5000mの情報 <p>空井戸でなくてよかった。暴噴でも石油のある方が……。すべて破壊されておめでとうと言われる。</p> <p>N, 大慶勝利の意味 労働英雄王進喜の活躍、体をはって暴噴をふせぎ、大慶油田を守った。</p>
<p>⑦ 日本の石油現場 (長岡市)</p> <p>⑩ 油層の検層, アニメーション, コアラボ 最後の段階でトラブルに悩む現場 試ガス 炎の中の作業員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャスター 日本の石油技術の水準について、石油技術の秘密性。 (インタビュー) ツールプッシュャー (現場責任者) のことば、春に掘削が始まって安定していたのは1カ月ほどで、それ以降はトラブルの連続でした。宇宙から見るとわずか4kmから5km掘るのにどうしてこんなにむづかしいのか、宇宙開発以上ですね。
<p>⑧ 廃棄ビットの語る石油技術</p> <p>③ 35箇の廃棄ビット。その中に立つキャスター</p> <p>③ ターボドリル</p> <p>③ ビットメーカー, ヒューズ社 ウィリアム・キスラー副社長 インタビュー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャスター ビットは地底の状況を、工事の進み具合と掘削のむづかしさを如実に語る。 ・ターボドリルに代表されるソ連の技術とその長所と泣きどころ。 ・アメリカの石油技術のすごさとその戦略性
<p>⑨ 石油の最先端技術</p> <p>③ 1) コンピュータのかたまり, 石油探査船ネルソン号</p> <p>③ 2) 衛星を利用した数cmも狂わない掘削船セドコ445号。</p> <p>③ 3) 北極海の掘削現場</p> <p>4) キャスターBS, 結語</p>	<p>キャスター</p> <p>巨大な石油技術を駆使した地底との戦いは今や砂漠に、海洋に、そして北極の海にさえ広がっている。そして技術が世界の政治を動かす時代となったのである。</p>
<p>⑩ ラストタイトル</p>	

さらにここで私たちが考えた、物が語る強さ、証拠物件で物事の本質をみる1つの試みとして、

構成表の「⑧廃棄ビットの語る石油技術」についてくわしく見てみたい。

項目 映像	音声 コメント	⑩はフィルム ⑨はスタジオ SE 効果音 M 音楽
<p>⑧ 廃棄ビットの語る石油技術, スタジオ</p> <p>1)・35箇のビットとその中に立つ勝部キャスター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャスター, ビットの間を歩く ビットのさびついた鉄の肌を強調する. ・大きいビットの前で最小のビットをとりあげる. ・歩いて無キズに近いビットのところに行く ・歯もボロボロのビット→Z I してボロボロの歯 up ・キャスター BS 	<p>キャスター</p> <p>長岡でも世界最高技術を集めて掘っていたんですが、それでも楽ではなかったわけです。ここで井戸を掘るのに使われて、今はもう廃棄処分になったビットを集めました。</p> <p>深さ4800mを掘るのに大体、68個を使ったんですが、このうち35個をここに借りてきました。大体ビット1個600万円もするものもあるそうですが、使ってしまうば廃棄処分、石油掘りは非常に金のかかる仕事です。で、このビットですが一番最初に掘り始めたときのもので、直径が65cm、重さは600kgもあります。深くなるにつれてビットはだんだんと小さくなるんですが、これが一番最後に地底を掘ったビットです。直径12cmしかありません。</p> <p>それからビットの中にはいろいろ苦労したものがあります。この場合は一挙に300mも掘りましたが、このビットの場合は、途中で非常に固い岩盤にあたっただめに30cmも掘れませんでした。あの鋭い鋼鉄の刃がボロボロです。地底の状況が私たちの想像をこえるものであることをよく示しています。</p>	
<p>⑨ 2) 模型のビットとパイプを手に、キャスターの説明。</p>	<p>キャスター</p> <p>ビットは大体9m位のパイプを次々に継ぎ足しながら地下を掘りすすむ。地下5000mも掘ると500回以上のパイプのつなぎかえをしなければならぬ。地下のビットがイカれるとそのとりかえは大変な手間と時間を、ひいては金をムダにすることになる。</p>	
<p>⑩ 3) ダイナードリルの回転実演 (ターボドリル)</p>	<p>キャスター</p> <p>石油掘削の方法には今まで述べた方法以外に、先端部分だけを回す方式がある。</p>	
<p>⑪ 傾斜掘りのアニメーション</p> 	<p>N 穴の底がビットだけ回転させる技術、いわゆる先端回転掘削は西側では、穴を斜めに曲げる時だけ使う。その重要性は海底油田の発達とともにますます重要になっている。そしてソビエトでは、この技術を掘削の全工程に使う場合が多い。</p>	

4 ターボドリルとビットの戦略性

- ・原理模型, プラスチック
- ・キャストアロで吹いてまわす
- ・実物のターボドリル
- ・分解されたタービン部分
- ・先端のターボおよびビット

5 ビットの製造技術

⑩ アメリカ ヒューズ社にて

工場内の製造風景

タングステンビットのチップ埋め込み

ウィリアム・キスラー副社長

インタビュー

内容テロップ

スーパー

キャストアロ

ターボドリル(ダイナードリル)の仕組みの説明。この方法は高速で回転するため、掘削のスピードは早くなるがビットの磨滅は、回転式とは比較にならないくらいはげしい。この高速に耐えられるビットが必要となる。ソビエトはまだこれを作る技術がなく、ビットを制するものが、世界の石油を制す。アメリカはビットを対ソ連の外交の道具とする。

キャストアロ

ヒューズ社は世界最高のビット製造会社。世界の石油マンがそのノウハウを求めて集る。しかしそのタングステンチップの埋め込み技術はどうしてもマネできないといわれる。ヒューズ社 副社長インタビュー

〈特許をとった技術もさることながら〉

〈わが社は未公開技術のほうがすごいのです〉

〈当然のことですが企業秘密として特許申請すら、しておりません〉

〈わが社の製品はそうした極秘技術に支えられているわけです〉

キャストアロ

この知られざる、極秘技術こそ、アメリカ石油産業界の底力といえるものなのです。

材料を最後に料理し味つけし皿に盛る作業は、編集である。

『誰かが部屋から出てゆく。部屋が荒されている。争いのあとのクローズアップ、椅子の背を伝って血が流れている。この映像の組合せで十分である。争いの場面も犠牲者の姿も私たちは見る必要はない。われわれはすべてを悟る。映像は編集によって生命を得る。個々のショットを一定の順序にならべ、組立ての連続が一定の意図された効果を生むように総合する。これは1つ1つ部品を集めて作動する物を生産する機械を組立てる技師の仕事と同じである。——ベラバラージュ』

どんなに強烈な豊かな表現力をもつ視点も、それだけでは対象物のもつすべての意味をテレビに表現できない。最後の瞬間に行なわれる1つ1つの部分的ショットの統一整合によってのみ編集は完成する。

現在テレビジョンはさまざまな表現手段を手に行っている。電子的な表現技術の進歩はめざましいVTRの編集技術、表現手段など1カ月も留守をすると様が変わりということさえある。しかし番組

にとって本質的なことは、さまざまな情報、材料を視聴者にいかに分りやすく興味深く料理してみせるかである。それは新鮮な材料を集め、ユニークな物の見方による構成編集にかかっている。

いまや情報過多時代を迎えて、私たちはなにごとについても「すでに知っている」と思いこみがちだが、実はその中にいかに多くの「未知」の事柄が潜んでいることであろうか。しかしその知られざる側面が全体を動かすキー・ポイントである例をこのNHK特集石油シリーズはよく教えてくれる。私たちは「日本の条件」シリーズを制作するに当たり、この視点を大切にしてきた。

第2シリーズで「外交・何が世界を動かすか」では海洋法会議を克明に取材することによって国際政治そのものを茶の間のブラウン管に写し出した。外交という庶民にとって最も縁遠いものを国民の手近にひきよせてみせた。

第3シリーズ「食糧・地球は警告する」では、地球上の表土、種子、肉食に視点を定め、今まで私たち日本人が知らなかった側面から食糧問題を解明した。